

序 グリッサンの生涯と作品

生い立ち

カリブ海のフランス領マルティニック島。沖縄本島ほどの大きさで、熱帯気候のこの島の北部には、鬱蒼とした深緑の密林に覆われた小高い山が連なっている。こうした丘陵地帯に切り拓かれた北東部の集落ブゾダンで、一九二八年九月二十一日、エドゥアール・グリッサンは生まれた。

彼が生まれた年は、フランスで奴隷制が完全撤廃されて六十年目に当たる。一六三五年以来フランスの植民地であるマルティニック島では、ヨーロッパ向け産品としてサトウキビなど熱帯作物を作る農園（プランテーション）の働き手は、主にアフリカから連行された奴隷で担われた。一六八五年に黒人法典という奴隷制社会のためのフランス法が制定されて以降、奴隷制は一八四八年まで存続した

（フランス革命の影響で一七九四年に奴隸制は一度廃止されるものの、当時イギリス支配下にあったこの島には伝令は不達だった）。

グリッサンが生まれた時代には、奴隸制の名残がいまだそこかしこに認められた。当時の主要産業は、奴隸制時代以来のサトウキビ農業だった。父はサトウキビ農園の管理職という比較的高い地位にあった。このためだろう、父はある時期まで自分の姓を子に名乗らせなかった。彼の戸籍名は、母方の姓で「マチュー・エドゥアール・ゴダール」と登録された。

母は子供たちを連れてブゾダンを離れ、マルティニックの中央の平野地帯に位置するサトウキビ経済の中心地ラマンタンに移り住むことを決意する。マチュー・ゴダールという名を授けられた幼子（エドゥアール・グリッサン）が生後一カ月のときのことだという。母に抱き抱えられて山から平野を降っていたこのときの経験は、創作と思考の原風景として後年、老境に入った作家によって何度も語られることになる。

一九三八年、マチュー・ゴダールは島唯一のリセ（中高一貫校）に奨学金を得て入学する。奴隸制廃止の立役者の名を冠する「リセ・シエルシエール」は、ラマンタンの隣町に当たる島の中心地フォール・ドゥ・フランスに所在するエリート校だった。この入学をきっかけに父は子を正式に認知し、マチュー・ゴダールは以後「エドゥアール・グリッサン」を名乗るようになる。夏休みには父親に付いて各地のサトウキビ農園を巡った。

学校ではフランス式植民地教育が実施された。読書好きだった少年は、『三銃士』のようなフランスの少年向けの歴史物語を好み、ラテン語の古典作品の訳読を得意とした。しかし、教師のなかには

エメ・セゼールとルネ・メニルという島の植民地状況に懐疑的な文人がおり、学校教育の場で学ぶものとは異なる評論や文学作品を掲載していた雑誌『トロピック（熱帯）』（一九四一―四五年）を発行していた。

ときは第二次世界大戦中であり、ヨーロッパから遠く離れたこの島も、一九四〇年六月から四三年七月にかけて対独協力政府の直接統治下に置かれる。そうした政治状況に対抗する目論見もあった『トロピック』の主な読者は、リセ・シエルシエールの生徒たちだった。グリッサンはメニルを教師に持ち、セゼールの詩や批評を『トロピック』で知った。

第二次世界大戦が終結を迎える頃、グリッサンは、ラマンタンで結成された青年組織「フラン・ジュ（正々堂々と）」に最年少で加わる。この組織は政治・文化問題を議論し、詩を書き、同人誌『フラン・ジュ』を発行した。ここに掲載された詩や演説の原稿がグリッサンの最初期の刊行物である。

戦争の終結はマルティニックの政治状況を大きく変える期待をもたらした。一九四五年の選挙でフラン・ジュは文化政策に注力する共産党を明確に支持する。いまだ選挙資格のないグリッサンは、このグループの仲間たちとラマンタンの市町村選挙で共産党候補を支援し、政治家に転身したセゼールへの支援活動をおこなった。この選挙では共産党員が圧倒的勝利を収め、セゼールはフオール＝ド＝フランス市長にして国民議会議員に選出される。晩年のグリッサンはこのフラン・ジュの時代の断片的回想を著述のなかにしばしば残した。

一九四六年、セゼールの主導のもとマルティニックは、カリブ海とインド洋の他のフランス領（グアドループ、ギューヤンヌ、レユニオン）とともに、行政上の地位を植民地から県に昇格することが

宗主国議会で可決される。この法案の可決に尽力したのがセゼールだった。いわゆる海外県化法案の可決のこの年、リセを卒業したグリッサンは奨学金を得て、汽船でフランスに渡った。

詩人としての出発

パリに到着したグリッサンは、ブロンデル通り四番地に所在した学生寮（元娼館）で、フランス植民地出身の学生たちと一緒に過ごした。そこで出会った学友の一人が同郷のフランツ・ファノンである。グリッサンと同年に本土にやって来たファノンはリヨンの医学生だったが、パリのこの学生寮で一時期を過ごした。

グリッサンはソルボンヌ大学で哲学を学び、ガストン・バシュラール、モーリス・メルロー・ポンティの授業を受けた。一九五三年にはジャン・ヴァールを指導教員とする論文「同時代の詩における世界の発見と構想」で哲学の高等研究免状を取得した。それと併行して、人類博物館の民族学の授業も受けた。

こうした学業の一方で、詩作にも打ち込む。マルティニック時代の『フラン・ジュ』以降、グリッサンの最初の公的出版物は、ジャン＝ポール・サルトルが主宰する『レ・タン・モデルヌ（現代）』誌第三六号（一九四八年九月）に発表した七篇の詩である（のちに『釘付けにされた血』に収録）。

グリッサンの詩を高く評価したのは、ミシェル・レリスだった。レリスはマルティニックに民族学的調査で赴いた際、『フラン・ジュ』を手にしてその詩才を認めた。レリスと直接の交流を持つよ

うになる一九五〇年以前から、グリッサンはレリスに定期的に詩を送り、これがきっかけで『レ・タン・モデルヌ』誌に掲載されたと言われる。なお同誌第五二号（一九五〇年二月）にはレリスが中心となったアンティル特集号が組まれ、フラン・ジュの仲間の詩が掲載された。

一九五三年、生活をともしにする最初のパートナーであるイヴォンヌ・シュヴェロールとのあいだに一子（パスカル）を授かったこの年、最初の詩集『島々の野』を出版した。この詩集の出版を引き受けたマックス・クララクセルは、一九五五年にドラゴン画廊を開業する（一九九五年閉業）。

この画廊が所在したドラゴン通り一九番地で、グリッサンは多くの詩人や画家と交流した。カリブ海やラテンアメリカの芸術家の個展もそこで開催され、画廊が刊行する薄型のカタログに批評文をししばし寄稿する。グリッサンが同画廊のカタログも含めて何度か批評するチリの画家ロベルト・マッタには別の機会（一九四七年）に出会って以来、長い親交を持つことになる。

二冊目の詩集『不安な大地』は、ドラゴン画廊開業の年、同名の版元からキューバの画家ウィフレド・ラムのリトグラフを添えて刊行された。

パリでさまざまな詩人や作家と友情を育んだ。そのなかに文芸評論家として知られるモーリス・ナドーがいる。ナドーが一九五三年に創刊した文芸誌『レ・レットル・ヌーヴェル（新文芸）』（一九七七年終刊）には当初から参加し、詩に加え、多数の書評と文学評論を寄稿する。

アフリカ系知識人のサークルとも交流を持った。一九四七年創刊の雑誌『プレザンス・アフリケーヌ（アフリカは存在する）』（刊行中）に関わり、同誌の版元である同名の出版社が一九五六年にソルボンヌ大学で開催した「第一回黒人芸術家・作家国際会議」には、マルティニックの代表として、セ

ゼールやファノンとともに参加した。この会議後、アフリカ文化促進のための組織「アフリカ文化協会」が発足し、メンバーに加わった。

同会議に参加した年はパリに来てから十年目に当たる。この年（一九五六年）、グリッサンは最初の詩的散文集『意識の太陽』と長篇散文詩『インド』を、ファレーズ社（一九四九―一九五九年）から刊行した。『意識の太陽』は、フランスで初めて経験した雪と故郷の熱帯風景との比較考察をはじめとする、グリッサンの詩学の出発点を告げる作品である。「一つの陸地ともう一つの陸地の詩」という副題を付した『インド』は、コロンブスが「発見」した「新大陸」の歴史とその帰趨を叙事的に描いた、詩人の歴史意識が明確に提示される初期の代表作である。グリッサンの密度の高い作品の刊行はこの時期から相次ぐことになる。

文学と政治

一九五八年、グリッサンは最初の小説『レザルド川』をフランスの著名な版元スィユ社から発表する。マルティニックでの思い出を題材に人々の政治意識の覚醒を島の風景に重ね合わせて詩的に描いたこの作品は、同年のルノー賞受賞という榮譽に浴した。同賞の受賞は、作家の知名度を高めるとともにその実力を保証するものとして社会的に機能した。以後、グリッサンの作品は基本的にスィユ社から刊行されることになる。

一九五九年、「第二回黒人芸術家・作家会議」がローマで開催された。この会議で、彼の政治活動